

ブックリスト

※ブックリストは3館の全展示資料です。各館対象資料はブックリストの「展示館」をご参照ください。

※このブックリストには、選出された一文/一言に対する推薦者からのコメントを掲載しています。選出された「心に刺さった一言」は、ぜひ図書館でご確認ください。

タイトル	著者	出版者（出版年）	推薦者からのコメント	展示館
赤毛のアン	モンゴメリ著 村岡花子訳	新潮社（2008）	アンの名言は多々あれど、わかりやすく前向きさが伝わるこの言葉が好き。そして今読み返して改めて思う。アンが令和に生きていたら、きっと最高のラッパーになれただろう、と。あの語彙力と発想力、マジすごい！	小金井図書館
アルジャーノンに花束を	ダニエル・キイス著 小尾芙佐訳	早川書房（1999）	物語冒頭の最初の一文。本当はクライマックスのシーンからにしたかったものの、ネタバレになりかねないのでコッチを。最初にこの文章を目にしたときは面食らいました。本当に読みづらかったです。ただ、読み終わったら“読んでよかった”と、そう思える本だと思います。	小金井図書館
育児の百科：定本 中	松田道雄著	岩波書店 （2007～2009）	はじめての育児でわからないことだらけで不安ななか、何度もこの本に助けられました。病気やその予防・治療についてなど今見ると古い部分ももちろんありますが、通底する子どもへの優しい眼差しが、このひと言に込められているように思います。	市ヶ谷図書館
イツ・ダ・ボム	井上先斗著	文藝春秋（2024）	ストリートカルチャーの大御所たちに向けた辛辣なひと言。このひと言を受け止めるのが、社会的に成功しているわけではない1人のグラフィティライターっていうところがかっこいい。	市ヶ谷図書館
推し、燃ゆ	宇佐見りん著	河出書房新社（2020）	主人公が生きる上で、推しがどのような存在なのかを表現した重い一言だと思います。読み進めるとしっくりくる一言だけに、背骨を失ったら・・・という怖さも感じます。	市ヶ谷図書館
風の万里黎明の空 上	小野不由美著	新潮社（2013）	誰かに幸せにしてもらおうとしたり、不幸を誰かのせいにしたりするのではなく、自分自身で幸せになろうとすること。置かれた境遇に捉われず、自らの意思で前を向く大切さを教えてくれる一文です。	多摩図書館
カフーを待ちわびて	原田マハ著	宝島社（2008）	どこかで体験した自身の感覚を呼び起こしてくれる一文。大切な人、楽しみな日、それが何であっても、こんなに美しい言葉で表現されると、「待ちわびる」こと自体を待ちわびたくなります。	市ヶ谷図書館
烏百花 蛍の章	阿部智里著	文藝春秋（2020）	自分には"それ"しかない己の気持ち全てを差し出す潔さがかっこいいです。それだけ相手を想えることこそが、何物にも代えがたいことだと分からさせます。	多摩図書館
傷を愛せるか	宮地尚子著	筑摩書房（2022）	トラウマ研究の第一人者による心に沁みとおるエッセイです。 深い哀しみや苦しみの中でもがいているときに、弱さを受入れ、寄り添い、希望を失わない言葉の力は時に何よりも強いと感ずることが出来ます。	小金井図書館
銀河英雄伝説 野望篇	田中芳樹著	徳間書店（1983）	この一言で沼にはまりました。名言の宝庫とも言えるこの作品、あなたもお気に入りの一言を見つけてください。	多摩図書館
草祭	恒川光太郎著	新潮社（2011）	これくらいの気持ちで構えられたら、穏やかで平和に過ごせる！ちょっと俯瞰して心を鎮めたいときに思い出す一文。	市ヶ谷図書館
小泉八雲東大講義録：日本文学の未来のために	ラフカディオ・ハーン著 池田雅之編訳	KADOKAWA（2019）	学問を志す者は如何に読書をすべきかを語る講義の一文。ながら読み常習犯、読んだ本の内容をろくすっぽ覚えられない自分には耳に痛い内容です。	市ヶ谷図書館
恋する寄生虫	三秋縋著	KADOKAWA（2016）	「～さんは私のことを何も知らないからそんなことを言えるんですね」のクリティカルなアンサーだと思いました。周りの皆さんを大事に生きたいです。	多摩図書館
さがしもの	角田光代著	新潮社（2008）	本好きなら一発で共感できる一言。これだから読書はやめられない。	市ヶ谷図書館・小金井図書館
シャネル：シャネルを支えた8人のレジェンドと生きている言葉 = Chanel	川島ルミ子著	さくら舎（2020）	ど頭にかかれたこの言葉。この本にはシャネルの数々の言葉が載っているが、人生の後半に行くにしたがって少しずつ変化がある。そして絶対に変わらない部分も。その変遷を迎えることで見えてくるものがあるはず。	小金井図書館
終末のフール	伊坂幸太郎著	集英社（2006）	日々押し寄せる出来事や感情の中で、忘れてしまいがちな生きることの本質についていると思います。この本は8年後に地球が減ぶとわかって、5年後（地球滅亡まで3年）の人々の話でライトな語り口の伊坂幸太郎ワールドだからこそ読み進められました。ぜひご一読ください。	小金井図書館
重力ピエロ	伊坂幸太郎著	新潮社（2003）	「こんな気休め」と思うようなことでも何かを救うこともある。先を見据えすぎて手元が見えなくなっているとき、肩に力が入りすぎているときに思い出したい一文。	市ヶ谷図書館・小金井図書館

ブックリスト

※ブックリストは3館の全展示資料です。各館対象資料はブックリストの「展示館」をご参照ください。

※このブックリストには、選出された一文/一言に対する推薦者からのコメントを掲載しています。選出された「心に刺さった一言」は、ぜひ図書館でご確認ください。

タイトル	著者	出版者（出版年）	推薦者からのコメント	展示館
性食考	赤坂憲雄著	岩波書店（2017）	食べる/交わる/殺すことのつながりについて、神話や物語から読み解いていく1冊。生々しいテーマなのに、しみじみ納得しながら読み進められるのは、わたしも普段は自覚していないけど動物だからなのかも。	市ヶ谷図書館・小金井図書館
千年の流転（ギケイキ 1）	町田康著	河出書房新社（2016）	苛烈で暴力的で、昔に生まれなくてよかったー！と思っているところを、「ほんとうに？ 実際のいまも変わらなくなる？ てゆかいまの方がやばくない？」と刺されるひと言。	市ヶ谷図書館
反橋；しぐれ；たまゆら	川端康成著	講談社（1992）	川端康成「反橋」「しぐれ」「住吉」三部作の冒頭に綴られる、この言葉。誰を探している言葉なのでしょうか。過去・現実・夢を自在に行き来する、川端の詩的な幻想世界へぜひ。	市ヶ谷図書館
墮落論	坂口安吾著	新潮社（2000）	坂口安吾の綴る言葉は、飾らない裸の言葉で、胸にずどんときます。そして安吾自身が説明しきれない、様々な意味が含まれていると感じます。ぜひ読んで、体感してみてください！	市ヶ谷図書館・多摩図書館
とにかくうちに帰ります	津村記久子著	新潮社（2012）	大学でも家でも、帰りたいと思える場所を見つけ続けられますように。	多摩図書館
なんとなく日々	川上弘美著	新潮社（2009）	著者が専業主婦だった数日間に、夫以外の男性と会話を記録した時の感想です。いま読むと、SNSで世界中の意見や考えを見ているようで、実際ほんの一部しか見てないのかもしれないな、ということに思いを馳せるひと言でした。	市ヶ谷図書館
虹の岬の喫茶店	森沢明夫著	幻冬舎（2013）	今まで夢は私たちを目指すもの、指標として捉えていましたが、この本に出会い読み進めていくにつれ夢の捉え方が変わりました。「夢」はただ将来なりたい職種を表すものではなく「夢見ていること」でも良いと気付くことができました。丘の上の喫茶店が舞台になっているこの本で心温まりませんか。	多摩図書館・小金井図書館
			楽しい思い出もあれば苦い思い出もあるのが人生。過去を大切にすることが今の自分を自然と成長させてくれるきっかけになるのだと学びました。森沢明夫さんの作品は章ごとに主人公が変化するものが多く、一冊から多くの価値観を学べるのが魅力です！	
原節子の真実	石井妙子著	新潮社（2019）	圧力を柔らかくかわして、自己を貫いたというところが、良いと思いました。「～するべき」という大小いろんな圧力、時に「うるさいな」と思うことと皆あるのではないかと思います。	多摩図書館
羊をめぐる冒険 下	村上春樹著	講談社（1985）	「自分の弱さ」は、もしかすると「自分らしさ」なのかもしれません。春樹の青春三部作完結編です。ぜひ「僕」と一緒に冒険に出て、鼠の選択を見守ってください。	市ヶ谷図書館・多摩図書館
風俗小説論	中村光夫著	講談社（2011）	評論なのに、エモい表現が出てきてドキッとします。ですます調で書かれているのもユニークです。	市ヶ谷図書館
ペンギン・ハイウェイ	森見登美彦著	角川書店（2010）	街に突然ペンギンたちが現れる事件やこのお姉さんの謎を小学生の「ぼく」が研究するSF小説です。お姉さんの謎をぜひ読んで確かめてください。	多摩図書館
ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー：the real British secondary school days	ブレイディみかこ著	新潮社（2019）	イギリスの元、底辺中学に通う息子と母親が差別、貧困、無知、多様性をつきつけられる中で、悩みながら、自分たちなりに消化して乗り越えていく様にひきこまれます。	小金井図書館
麦本三歩の好きなもの	住野よる著	幻冬舎（2019）	あの時は良かった、あの時に戻りたいって思うことがよくある。しかし、この文章を読んですぐく納得した。確かに輝いている過去はある。一方今日これから起こる数々の嬉しいことのことを考えると、今も頑張ろうと思える。そんな勇気を与えてくれると思う。是非、読んでみてほしい。	小金井図書館
家守綺譚	梨木香歩著	新潮社（2006）	梨木香歩さんの文章は優しく幻想的で、情景や音が鮮やかに頭の中に広がっていきます。美しい言葉に触れたいときに読みたくなる本の一節です。	市ヶ谷図書館・小金井図書館
横道世之介	吉田修一著	文藝春秋（2011）	これは世之介の母が、世之介について思いを馳せて綴った言葉です。この言葉が表すように前向きな世之介は、私たちに元気を与えてくれます。法政大学がモデルになっているので、身近に感じられてオススメです！	市ヶ谷図書館・多摩図書館・小金井図書館

ブックリスト

※ブックリストは3館の全展示資料です。各館対象資料はブックリストの「展示館」をご参照ください。

※このブックリストには、選出された一文/一言に対する推薦者からのコメントを掲載しています。選出された「心に刺さった一言」は、ぜひ図書館でご確認ください。

タイトル	著者	出版者（出版年）	推薦者からのコメント	展示館
夜のピクニック	恩田陸著	新潮社（2006）	第2回本屋大賞に輝いたベストセラー。「愛してる」という言葉は知っていても、愛という言葉にどれだけ多くのものが内包されているかに気づき、実感するのは難しいもの。他にもたくさんの気づきが見つかる物語です。	市ヶ谷図書館・小金井図書館
六人の嘘つきな大学生	浅倉秋成著	KADOKAWA（2021）	最終選考に残った六人の大学生、内定は一人。封筒をきっかけに始まる告発。犯人は誰なのか。作者の手のひらで踊らされ、最後に突きつけられるのは、読者自身も「月の裏側」だけを見ようとしていたという事実。	多摩図書館・小金井図書館